

2015 年度（平成 27 年度）

事 業 報 告

－ 2016 年 6 月 10 日 －

公益財団法人国際高等研究所

事業報告

目次

I. 2015 年度事業活動の概要（総括）	・・・ 1
II. 研究事業の推進	
1. 総括	・・・ 4
2. 基幹研究事業	・・・ 4
3. 研究プロジェクト事業	・・・ 4
4. その他	・・・ 5
III. ソーシャル・コミュニケーション活動の企画・実行	
1. 「ゲート会」の企画・運営	・・・ 6
2. IIAS 塾「ジュニアセミナー」の試行実施と事業概要	・・・ 6
3. 「エジソンの会」の企画・準備	・・・ 8
4. 「けいはんなオープンイノベーションセンター」への協力と協働	・・・ 8
5. 広報活動の推進	・・・ 8
IV. 法人運営の状況	
1. 戦略会議 IIAS Strategic Committee (ISC) 第 2 期の発足と審議の開始	・・・ 10
2. 諸規則・規程類の制定・改訂	・・・ 11
V. 財務・収支状況	
1. 経常収益の概要	・・・ 12
2. 経常費用の概要	・・・ 12
3. 最終収支	・・・ 12
4. 今後の見通し	・・・ 13
5. 債券の運用について	・・・ 13

公益財団法人国際高等研究所
2015年度(平成27年度)事業報告

I. 2015 年度（平成 27 年度）事業活動の概要（総括）

2015 年度は、長尾真京都大学名誉教授が第 7 代所長に就任し、3 名の副所長を迎えた強力な研究運営体制の下、2014 年度に高等研の基本理念を再定義し、高等研の存在意義を取り戻すべく検討された戦略会議第 1 期 ISC の最終答申の具現化を図るため、基幹プログラムをスタートさせたという重要な節目となった年度である。

1. 新研究運営体制の発足

前所長の任期満了退任に伴い、公益財団法人国際高等研究所第 7 代所長には、長尾真京都大学名誉教授（京都大学元総長・前国会図書館館長）と、所長人事に併せた 3 副所長の就任が決まり、2015 年 4 月 1 日付けにて新研究運営体制が発足した。

○第 7 代所長

長尾 真 氏 京都大学名誉教授
京都大学元総長
国会図書館前館長
(情報工学／自然言語処理・画像処理・パターン認識)

○副所長

有本 建男 氏 政策研究大学院大学教授
(科学技術政策)

位田 隆一 氏 京都大学名誉教授
同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科特別客員教授
(国際法、国際生命倫理法)

松本 紘 氏 京都大学名誉教授・前総長
理化学研究所理事長
(宇宙科学、宇宙電波工学)

2. 高等研の基本理念に立ち戻った 2015 年度基幹プログラムの立ち上げ

高等研の公益財団法人としての活動の在り方については、2013 年度～2014 年度を通じて長尾真先生を議長とする第 1 期 ISC 活動によって、基本理念の現在における解釈と、そこから設定されるべき課題と解決の方向性に係る視点が明らかにされ、高等研のあるべき姿の明確化が図られた。当該 ISC 活動の成果は、2015 年 3 月に第 1 期 ISC 最終答申として取りまとめられ、公表された。

2015 年度からは、長尾真所長を中心とする新研究運営体制において、第 1 期 ISC 最終答申で提言された「高等研として直ちに取り組むべきこと」に基づいて立ち上げた基幹プログラムの実行等を通じて、高等研の活動は本来的な価値を創出しつつあるとして、社会からの期待が高まっている。

3. 第2期ISC活動の開始

第1期ISCの長尾真議長から、議長を村上陽一郎第1期ISC委員に交代して2015年4月1日付けにて第2期ISCを発足させた。

立石理事長からは、第2期ISCの村上議長に対して、第一として『人文社会系の学』と『社会』との乖離について、第二として、シンクタンク型の受託研究を行うための「新たな研究ドメインとプロセスの確立」について、2課題の諮問を行い、実質的な検討に入った。2017年3月末の中間答申または最終答申の取りまとめを目指すこととした。

4. 運用財産の見通しに基づく中長期に係る法人運営戦略策定に向けた取り組み

第71回評議員会（2015年6月29日開催）における「2014年度事業報告『VI. 財務・収支状況』4. 今後の見通し」において、公益を持続的に社会に提供するためのゴーイングコンサーンとして収支相償を実現するために、抜本的な法人運営戦略の具体的な議論が必要との認識に基づき、第90回理事会（2015年9月15日開催）における、「高等研における中長期運営戦略について」と題する自由討議を皮切りに、中長期的な法人運営戦略に繋がる事業展開の在り方について検討を開始した。

これは、現在の基幹プログラムを中心とする研究ドメインに加えて、社会との連携の強化と収支相償を企図し、新たにシンクタンク型の研究ドメインを創設できないかと構想するものである。

さらに、このような新たな研究ドメインを実行に移す場合を想定して、クライアントとのインタフェースを果たし、受託研究を遂行するためのプロセスについての具体的な構築についても検討に着手する必要があると提案があった。

このような新たな事業展開のため、基幹プログラムを中心とする研究ドメインに加え、新たに、シンクタンク機能のための研究ドメインの在り方、運営方法、及び業務実行のプロセスについての検討に着手した。

5. ソーシャルコミュニケーション活動としての新規展開

交流活動として試行的に実施している「ゲートの会」については、その企画・運営が高く評価され、高等研の知的ハブとしての機能をけいはんな地区の幅広いステークホルダーに認知いただくに至った。

また、当該活動から派生した新規事業として「ILAS塾ジュニアセミナー」の立ち上げや、さらに外部組織として発足した「グリーンイノベーションフォーラム」への支援・協力など新たな連携が生まれるところとなった。

さらに、長尾所長の提案に基づく「エジソンの会」を発足させた。これは、けいはんな学研都市が標榜する「立地機関間の連携とそれによる成果の創出」を促進するため、立地機関や企業の研究者・技術者のコミュニティを形成し、具体的なオープンイノベーションの成功事例の確立に寄与することを目的とするものである。

2015年度には、代表的な立地機関・企業のキーマン、ライトマンに参画いただき、けいはんな学研都市における共通課題、とくにオープンイノベーションや協働による成果が創出

されない理由や、どのような連携や啓発を目指しているかについて意見を抽出した。

6. 高等研広報用のブックレットの発行

高等研としてのプレゼンス効果の向上を図る意味から、第1号として第1期ISC最終報告ブックレットを2015年10月に、続いて30周年記念フォーラムブックレットを2016年2月に発行した。なお、基幹プログラム「けいはんな未来懇談会」の中間報告書については、発行準備を行い、2016年4月に印刷を完了した。

7. 持続性ある組織づくりへの取り組み

ガバナンスの確立や持続的運営体制の構築に必要な諸規則・規程の制定については、その根幹部分の整備は2013年度に完了させ、2014年度以降においても引き続き運用実態に即した見直し等、よりよい運営に必要な調整を行っている。

また、職員の採用・育成計画を進め、持続性のある組織づくりに継続して取り組んだ。

8. 着実な資産運用

資産の短・中・長期の運用方針を検討した結果を踏まえ、2015年度に集中的に満期償還を迎えた11億円の保有債券の再運用を実施した。

Ⅱ. 研究事業の推進

1. 総括

2015年度を迎えて研究事業を中心とする事業運営の在り方について新たな研究所運営体制により協議が行われ、第1期戦略会議ISC（長尾真議長）からの答申（2015年3月）で「高等研として取り組むべきこと」として提言された3課題と、けいはんな学研都市の中核機関たる高等研として「けいはんな学研都市の今後30年を考える」ことが重要な使命であるとの認識に基づいて新たに企画された1課題については、理事会及び評議員会での了承を得て、これらの4課題を2015年度以降における主軸の基幹プログラムと位置付けて、研究事業を推進した。

なお、高等研カンファレンス・レクチャーに相当する国際的なアクティビティーについては、Ecole Normale Supérieure・パリ日本文化会館との連携によるラウンドテーブル・シンポジウムの開催とそれに伴う提携の締結を企画して、実施に向けて取り組んだが、諸般の事情から止むを得ず中止とした。

2. 基幹プログラムの推進（付属明細書1参照）

副所長が代表を務める基幹プログラムについては、研究メンバーの確定、具体的目的や研究会名の検討、論点の整理、分析などを行い、2016年度に展開する基盤を整えた。特に、「けいはんな未来」懇談会においては、中間報告書を取りまとめた（2016年3月）。

（1）将来の地球社会を考えた時の科学技術の在り方

（研究代表者：有本 建男 副所長）

（2）循環型、定常経済社会の構築の必要性とその方策

（研究代表者：佐和隆光氏 滋賀大学長）

2015年度は、研究活動の立ち上げ期に止むを得ない事情による当初の研究代表者の退任があり、2016年度の当該基幹プログラムの立ち上げを図るため、主導できる後任の人選を進めた。新たな研究代表者として佐和隆光氏（滋賀大学学長、京都大学名誉教授）を決定し、環境経済学、国際法、環境政策、エネルギー科学等の専門家による研究体制を整えた。

（3）多様な価値観を持つ社会や国家の平和的共存のための方策

（研究代表者：位田 隆一 副所長）

（4）「けいはんな未来」懇談会

（研究代表者：松本 紘 副所長）

3. 研究プロジェクト事業（付属明細書1参照）

研究プロジェクトは、研究活動において基幹プログラムと両輪を成し、相補的充実を図る中で独自性を発揮する研究活動と位置付けるものである。学問分野の越境し、社会的課題、人類と地球の未来への視点を取り入れた研究目的を有するプロジェクトも多く、研究プロジェクトの推進が結果として、基幹プログラムとの相互作用の可能性の追究に繋がったと考えられる。

2015 年度は、公募により研究プロジェクトを広く募り、厳選された 2 研究プロジェクトを新規に加えた。3 年目にクロージングテーマとした 2 テーマを含めて、次の 9 研究プロジェクトを推進した。

(1) 新規研究プロジェクト

- 1) 領域横断型の生命倫理プラットフォームの形成に向けて
(研究代表者：児玉 聡 京都大学准教授)
- 2) 人工知能に関する問題発掘型対話基盤と新たな価値観の創出
(研究代表者：江間 有沙 東京大学特任講師)

(2) 継続研究プロジェクト

- 1) ネットワークの科学 (2014 年度開始、第 2 年次)
(研究代表者：郡 宏 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授)
- 2) 精神発達障害から考察する decision making の分子的基礎
(2014 年度開始、第 2 年次)
(研究代表者：辻 省次 東京大学大学院医学研究科教授)
- 3) 生命活動を生体高分子への修飾から俯瞰する (2014 年度開始、第 2 年次)
(研究代表者：岩井 一宏 京都大学大学院医学研究科教授)
- 4) 設計哲学
～俯瞰的価値観に基づく、人口財の創出と活用による持続可能社会を目指して～
(2014 年度開始、第 2 年次)
(研究代表者：梅田 靖 大阪大学大学院工学研究科教授)
- 5) 総合コミュニケーション学 (2014 年度開始、第 2 年次)
(研究代表者：時田 恵一郎 名古屋大学大学院情報科学研究科教授)
- 6) 分子基盤に基づく生体機能への揺らぎとダイナミックネットワークの解明
(2013 年度開始、2015 年度クロージング)
- 7) クロマチン・デコーディング (2013 年度開始、2015 年度クロージング)

4. その他

(1) 競争的資金等の調達状況—科学研究費補助金「特定奨励費」2015 年度交付額

科学研究費補助金「特定奨励費」の 2015 年度交付額は 1,500 万円となった。研究事業名を「次世代に向けた学術の芽の発掘と育成に関する研究」とし、この下に高等研基幹プログラム、研究プロジェクト及びその他研究成果の取りまとめ等について取り組んだ。

Ⅲ. ソーシャル・コミュニケーション活動の企画・実行

高等研の事業活動の状況や成果と社会とをつなぐソーシャル・コミュニケーション (Social Communication) 活動の必要性については、第1期戦略会議 ISC 最終答申において提言された通りである。ソーシャル・コミュニケーションでは、高等研における事業活動やその成果を、社会の様々なステークホルダーに適切な形で届ける活動を種々のチャネルや媒体を通じて展開する「社会への問いかけ」活動を充実・強化する重要な位置付けとして捉えて取り組んだ。

1. 「ゲーテの会」の企画・運営（付属明細書2参照）

知的連携のための土壌醸成及び知的連携の促進を図るために、「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ“ゲーテの会”」を2013年度に立ち上げ、原則として毎月の満月の夜に公開セミナーを企画・開催している。現在では、けいはんな学研都市に立地する法人や企業の関係者、近隣住人など、広く一般を対象とし、40～50名を上限として参加者を募っているが、リピーターも増え、人的ネットワークに基づいて京都市内や大阪市内など、より広範囲の地域からの参加者も認められるようになった。

2013年度は「近代科学はこのままでいいのかーゲーテが描くもう一つの近代ー」や「近代科学をいかにして超えるかー自然と人間との関係性を考えるー」などを視点として実施し、2014年度は、主テーマを「未来社会はいかにあるべきかー人類の未来と幸福を考えるー」、「未来社会をいかに拓くかー未来社会を担う新しい人間像を探るー」として展開したが、2015年度は、ゲーテの会を発足させて3年目を迎えたことを踏まえ、「日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて」をテーマに掲げて、日本の近代化を導いた偉人の思想、行動の光と影を追う企画を展開した。2015年度実施状況については、別添参考資料に記載。

毎月欠かさず実施して活動を定着させたことで、参加者からは好評を得ている。またテーマや講演者の選定についても「高等研らしい」との評価を得ており、高等研が関西文化学術研究都市の中核機関として、相互の連携や知的活動、さらには参加者相互の人脈構築や交流の中心的役割を担うという「知的ハブ」の機能を果たせるものに育て上げられたといえる。

今後は、さらなる活動の活性化を目指すと共に、開催してきたことから得られた知的資産を次世代人材の育成事業「ジュニアセミナー」等に系統的に活用する事業展開を図る。

2. IIAS 塾「ジュニアセミナー」の試行実施と事業概要

高等研が主催する『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』は、2015年5月以降「日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて」をテーマに掲げ、日本の近代化を導いた偉人の思想、行動の光と影を追う企画を展開している。

現在社会にあって、科学技術至上主義や経済至上主義的風潮の下では、全人的な人間形成は困難となりつつあり、次代を拓くには、人間力の基礎をなす哲学（理性・感性）によって鍛えられた「独立自尊の志」を有する「全人」の養成が求められるとの認識に至った。

そこで、当該「ゲーテの会」の講演録をメインテキストとして、次代を担う青年を対象とするIIAS塾「ジュニアセミナー」ー「独立自尊の志養成」プログラムーを開催し、人材育成に資するセミナーを立ち上げた。

(1) 運営のために開催委員会の設置

委員長：長尾 真 所長

委員：猪木武徳 青山学院大学大学院特任教授

佐伯啓思 京都大学名誉教授

池内了 名古屋大学・総合研究大学院大学名誉教授

運営懇談会：2015年10月28日（火）

第1回開催委員会：2016年1月27日（水）@芝蘭会館別館

第2回開催委員会：2016年3月7日（月）@芝蘭会館別館

(2) 受講生：京都府・大阪府・奈良県下の高等学校の生徒18名を公募により決定した。

(3) 開催：2016年3月19日～21日（2泊3日、高等研での合宿）

(4) 講師とメインテキスト主題

1) 思想・文学分野

講師：佐伯啓思 京都大学名誉教授・京都大学こころの未来研究センター特任教授

テーマ：「夏目漱石に学ぶ～西欧の模倣(外発的開化)を脱し、主体の確立(内発的開化)を～」

2) 政治・経済分野

講師：猪木武徳 青山学院大学大学院国際政治経済学研究科特任教授、大阪大学名誉教授、国際日本文化研究センター名誉教授

テーマ：「福澤諭吉に学ぶ～デモクラシーの基盤としての公智と公德～」

3) 科学・技術分野

講師：池内 了 総合研究大学院大学名誉教授

テーマ：「寺田寅彦に学ぶ～科学者の先見性と文理融合の世界～」

(5) 後援：京都府教育委員会、大阪府教育委員会、奈良県教育委員会

協力：京都大学・大阪大学

(6) 事業概要

受講者は高校生を対象として公募するため、高等学校との連携が不可欠であり、京都府、大阪府、奈良県の各教育委員会の後援を得て開催した。

思想・文学、政治・経済、科学・技術の各分野について講師の講演の後、論点整理（テーマ提案）を行い、そのテーマに基づいてグループ討論を行った。グループ毎に討論結果の発表に基づいて全体討論を行い、受講者は最終日には当該セミナーで得られた成果についてレポートにまとめて提出した。レポートはチューターを依頼した京都大学大学院生が添削をし、総評を加えて各受講生に返却する。

なお、セミナー受講・討論及び宿泊は、全て高等研の研究施設及び宿泊施設において行った。

(7) 事業の成果

今回のジュニアセミナーは第1回の試行的実施であったため、公募による受講生の募集に工夫を要したが、結果的には、受講者が在籍する高等学校教員の推薦に基づく応募であったため、レベルの高い受講生を確保する事ができた。

受講生は、京都府域4校6名、大阪府域3校4名、奈良県域4校7名、愛知県1校1名、計18名であった。内訳は、男子10名、女子8名。また、3年生2名、2年生12名（中高一貫校の5年生2名を含む）、1年生4名であった。当初18歳前後の受講生を想定したが、1年生の参加があったことは、受講生を公募する際に、対象者の幅が広がったことの意義が大きい。

なお、セミナーでは、講義による知識の獲得に焦点を当てるのではなく、その講義

を題材として正解のない課題についてグループ討議を行い、討議を通じて多様な考え方を
する他者の意見を受け入れ、自分の考えをまとめる経験を通じて、新たな視点や幅広い
視野を獲得する意義を会得できたとする受講生が大半であり、当初のセミナーの狙い
が正しかったことが証明されたと考えられるため、今回の成果を今後の積極的な事業展
開に繋げる。

3. 「エジソンの会」の企画・準備

けいはんな学研都市が標榜する「立地機関間の連携とそれによる成果の創出」を促進する
ために、高等研が知的ハブとしての役割を果たし、立地機関の研究者や技術者のコミュニ
ティーを形成し、具体的な「オープンイノベーション」の成功事例の確立に寄与する。

2015 年度は、エジソンの会の趣旨に理解を示してくれた立地機関のキーマンに集まって
貰い、発足に向けた準備会合を開催し、関係者との協議を重ねて、2016 年度の正式発足に
向けた準備を進めた。

準備会合は、2015 年 10 月 15 日（木）及び 10 月 28 日（水）に開催し、目指す方向性
と根源的課題について意見交換を行い、これらの準備会合における議論を踏まえ、会発足に
向けて関係者との事前協議及び調整を行った。

その結果、2016 年度においては、1) オープンイノベーションの成功事例を作る端緒を
開くこと、2) オープンイノベーションの成功に必要な教育を試験的に実施すること、の 2
点にまずは焦点を絞って、リーンスタートアップを行うことを確認した。2016 年度事業計
画では、①AI の実用化に向けた勉強会、プレストの実施とオープンイノベーションテーマ
の創出、②オープンイノベーションに向けての勉強会の設置、③けいはんな若手研究者勉強
会のバックアップを明記し、事業化の方向性を明らかにした。

4. 「けいはんなオープンイノベーションセンター」への協力と協働

京都府が推進する「けいはんなオープンイノベーションセンター」（KICK：旧「私のし
ごと館」）の拠点整備に協力し、関連事業「オープンサイエンスの基盤となる多様なネット
ワークを活用した「未来の学び」の場の形成を核とする科学実践・普及推進モデル事業（略
称：科学実践・普及推進モデル事業）」の実行を支援するとともに、具体的活動にも参画し、
協働した。

5. 広報活動の推進

2015 年度の広報活動は、情報発信力に重点をおき、高等研の認知度の向上を図るための
活動を進めた。交流事業の一環として推進してきた人的ネットワークを基に、京都府、京都
大学、科学技術振興機構、関西文化学術研究都市推進機構などの関係機関の広報部門と、ポ
ータルサイトへの情報掲載などの協力体制を築いた。

広報コンセプトを具体的な広報媒体や広報活動に反映し、メディアミックスを見直した上
で効果的な発信を行うことを 2015 年度も引き続き目標として掲げたが、年度中に発信でき
るコンテンツが限定的であったことなどから、新たな発信手法の確立には至らなかったため、
2016 年度において広報戦略としての新たな手法や方策の確立を進める。

(1) 高等研紹介ブックレットの発行

広報活動の一環として、高等研事業紹介パンフレット、第1期ISC答申最終報告書及び30周年記念フォーラム実施報告書に係る高等研紹介ブックレット(和文版及び英語版)の発行を計画し、第1弾として第1期ISC答申最終報告書を2015年10月にリリースした。

第2弾となる30周年記念フォーラム実施報告書については、2016年2月に発行した。

(2) 研究活動の途中経過の中間とりまとめ

なお、基幹プログラム「けいはんな未来懇談会」の中間報告書については、「けいはんな学研都市の30年後に向けて」と題して取りまとめを行い、発行準備を経て2016年4月に印刷を完了した。

(3) アニュアルレポートの企画・準備

2015年度事業活動の状況を社会に訴求するためのアニュアルレポートの企画・準備を進めた。アニュアルレポートには、2015年度の研究活動を中心として、けいはんな学研都市における知的ハブ活動など、幅広いソーシャル・コミュニケーション活動の成果をわかりやすく掲載することを目的とするもので、その編纂に際しては、様々なステークホルダーに読んでいただき、理解を深めていただけるように、表現やアートディレクション上の工夫を図った。

高等研の基本理念や活動成果を一貫したコンセプトの下で、継続的に社会の様々なステークホルダーに訴求することも意図して実行するもので、2015年度版はその第一号として2016年6月末の発行を予定する。

IV. 法人運営の状況

2015年度は、立石理事長から第2期戦略会議ISC（村上陽一郎議長）に対して諮問のあった『人文社会系の学』と『社会』との乖離について、及び既存の研究活動とは別の枠組みとして、シンクタンク機能を想定した「新たな研究ドメインとプロセスの確立について」の2つについて検討を開始し、そのアプローチの方向性や切り口を見定めた。

2016年度はそこで検討された内容に基づき、特に人文社会系の学あるいは知と社会との関係性から検討を始めることとし、科学技術ドリブンの発展が続いた結果として社会が変わってしまうほどのインパクトを持つものや、人文社会系の知のあり方の問い直しを行う根源となる日本固有の文化と経済との融合を体現することとは何かという課題観に基づいて3つの視点として、①尊厳死・安楽死・PAD、②文化経済、③伝統文化芸術のサプライチェーンから検討を行うことを確認した。

第1期戦略会議ISC（長尾真議長）の答申に示された「高等研として取り組むべきこと」として提言された3課題1）「将来の地球社会を考えた時の科学技術の在り方」、2）「循環型、定常経済社会の構築の必要性とその方策」、3）「多様な価値観を持つ社会や国家の平和的共存のための方策」について、課題2）は2015年度当初の研究代表者の都合により中止とし、研究代表者を交代して実施時期を2016年度からに順延したが、1）については、「21世紀地球社会における科学技術のあり方」とし、3）については、「多様性世界の平和的共生の方策」として、当面3年程度の期間を要して研究活動を推進しているが、元の3課題については、高等研の研究事業の中核をなす柱（大枠の研究ドメイン）として中長期的に設定して継続的に取り組むため、第2期戦略会議ISCの答申から提案される課題については、新たな大枠の研究ドメインをなす可能性を検討するものである。また、3視点については、『人文社会系の学』と『社会』との乖離について検討する際に、最初からメタな議論をするのではなく、具体的な事例から検討を行い、メタな議論に展開する可能性を考慮したものとして取り組むこととした。

1. 戦略会議 ILAS Strategic Committee (ISC) 第2期の発足と審議の開始

(1) 議長及び委員構成：

議長	村上陽一郎	東京大学名誉教授・国際基督教大学名誉教授
委員	猪木 武徳	青山学院大学国際政治経済学部特任教授
	(当初の岩井 克人	東京大学名誉教授から交代して6月29日就任)
	大原謙一郎	公益財団法人大原美術館理事長
	笠谷和比古	帝塚山大学文学部文化創造学科教授
	黒木登志夫	日本学術振興会学術システム研究センター相談役

(2) 立石理事長からの諮問事項

立石理事長から、第1期ISC活動においても認識されていた課題認識を再整理したこと及び研究所運営の持続性確保の観点、大所高所からの示唆への期待から、第2期ISC村上議長に対して次の諮問が行われた。

1) 「人文社会系の学」と「社会」との乖離

2) 新たな研究ドメインとプロセスの確立

(3) 会合開催：

- 第1回 : 2015年6月6日 (土) 12:00~15:00 @学士会館: 第2期ISC発足
第2回 : 2015年11月10日 (火) 15:00~17:30 @オムロン本社
第3回 : 2016年2月16日 (火) 14:00~17:30 @高等研セミナー室-1

第3回会合においては、諮問事項に係るアプローチの方向性や切り口を見定め、2016年度の検討方針を討議した。2016年度は、特に人文社会系の学あるいは知と社会との関係性から検討を始めることとし、科学技術ドリブンの発展が続いた結果として社会が変わってしまうほどのインパクトを持つものや、人文社会系の知のあり方の問い直しを行う根源となる日本固有の文化と経済との融合を体現することとは何かという課題観に基づいて3つの視点①尊厳死・安楽死・PAD、②文化経済、③伝統文化芸術のサプライチェーンから検討を行うことを確認した。

2. 諸規則・規程類の制定・改訂

本法人の運営に関連して、ガバナンス及び内部統制システムの構築に係る基本方針の策定並びに法人運営に係る規則及び規程類の新規の整備方針を検討し、さらに法人運営の実態に鑑み、必要に応じて内容の見直しを図るため、下記の規則・規程類の制定及び改訂を図り、公益法人としての制度運営面の体制整備を図った。

(1) 新規制定

- ◎研究企画推進会議規程 (2015年4月1日付け)
- ◎再雇用職員就業規則 (2015年5月28日付け)
- ◎特定個人情報取扱規程 (2016年3月9日付け)
- ◎研究活動における不正行為への対応に関する規則 (2016年3月9日付け)

(2) 改訂

- 公的研究費の取り扱い規則 (2015年4月1日付け)
- 研究企画推進会議規程 (2015年5月28日付け)
- 資産運用規程 (2015年5月28日付け)
- 会計規程 (2015年5月28日付け)
- 就業規則 (2015年5月28日付け)

(3) 廃止

- 研究企画会議規程 (2015年4月1日付け)
- 研究推進会議規程 (2015年4月1日付け)

VI. 財務・収支状況

1. 経常収益の概要

運用益は、所有する仕組債券の利息や株式の配当金が見込を上回ったため、基本財産受取利息で予算比 108 万 6 千円増の 4,903 万円、受取配当金で予算比 13 万円増の 723 万円、ならびに特定資産運用益で 150 万 1 千円増の 320 万 1 千円となった。受取補助金等は、文部科学省からの特定奨励費である受取国庫補助金を計上しているが、予算通りの 1,500 万円であった。

雑収益は、交流事業「けいはんなゲートの会」の参加費や施設利用料、科学研究費補助金の間接経費などで、予算比 48 万 5 千円増の 600 万 9 千円となった。

なお、経常費用を賄うための収入不足を補填するため、研究事業推進基金を取り崩して受取寄付金等振替額として計上しているが、同振替額は 6,705 万 2 千円となり、これを含めた経常収益の合計は、1 億 4,752 万 4 千円となり予算比で 792 万 9 千円の減、前年比較で 2,061 万 4 千円の減少となった。

2. 経常費用の概要

経常費用のうち事業費は、研究事業に直接要する費用に、全体の管理に要する費用のうち研究事業に寄与する部分を配布計算に基づき按分した金額を加えて事業費としている。従って、管理費は全体の管理に要する費用のうち、事業費に按分した残りを管理費として計上している。

事業費の内訳では、委託費として予算計上した費用のうち、高等研ブックレット印刷費などを印刷製本費として計上している。旅費交通費等が見込みを下回ったため、事業費の合計では予算比で 812 万 6 千円減の 1 億 7,503 万円となった。また、前年比では前年のカンファレンスや 30 周年記念公開フォーラムに相当する事業の開催が当年は無かったため、1,832 万 2 千円の減少となった。

管理費については、人件費や委託費が見込みを若干上回ったため、管理費合計では予算比 22 万 5 千円の増加となった。

この結果、経常費用の合計は、1 億 9,209 万 6 千円となり予算比で 790 万円の減となった。

3. 最終収支

年間収支を相償うため研究事業推進基金を取り崩して収入に補填する受取寄付金等振替額は、予算に比べ 1,113 万 3 千円減の 6,705 万 2 千円で、前年比 1,017 万 5 千円の減少となった。

この結果、2015 年度の一般正味財産増減額は、4,468 万 1 千円減となり、予算比で 13 万 8 千円の減、前年比で 27 万円 7 千円の減となった。また、基本財産と研究事業推進基金の増減を表す指定正味財産増減額は、ムーンバット社株式や米国債等の評価減もあって 9,133 万 3 千円の減少となり、予算より 1,290 万 1 千円減少した。

以上の増減額をあわせた正味財産期末残高は、49 億 8,189 万 1 千円となり、予算比で 1 億 471 万 8 千円増加となったが、前年比では 1 億 3,601 万 5 千円の減少となった。

4. 今後の見通し

2016年度も、2015年度と同様に研究事業推進基金を取崩す予定であり、2016年度の取崩予定額 8,346 万 6 千円を差し引いた期末の研究事業推進基金の残高は、6,093 万 3 千円になる見込みで、2017 年度には研究事業推進基金から受取寄付金等収入への振替による補填ができなくなる可能性が高い。従って、事業資金確保のための基本財産の取崩し、もしくは新たな活動財源の調達が必要となる。この対応策については、中長期財政計画として取りまとめるとともに、社会に認められ、必要とされる事業展開を充実強化していくことで、収支相償に向けた抜本的な取り組みを行うこととしている。

5. 債券の運用について

2015 年度の基本財産の満期償還によって下の表のとおり再運用として 9 件の債券等を基本財産として購入した。

(2015 年度新規購入債券)

	銘柄	購入日	満期日	購入金額 (千円)	元本 (千円)
第 35 回資産 運用委員会	トヨタ自動車 AA 種類株	2015. 7. 22	2020. 10. 1	52, 990	52, 990
第 37 回資産 運用委員会	20 年第 46 回地方公共 団体金融機構債券	2015. 9. 17	2035. 9. 28	200, 000	200, 000
第 37 回資産 運用委員会	パワーリハーステュアル債 (ドイツ銀行・30 年)	2015. 9. 24	2045. 9. 25	100, 000	100, 000
第 37 回資産 運用委員会	ユーロ円リハーステュアル債 (モルガン・スタンレー・20 年)	2015. 9. 25	2035. 9. 25	100, 000	100, 000
第 37 回資産 運用委員会	みずほ銀行 コーポラル債 (20 年)	2015. 9. 25	2035. 9. 25	150, 000	150, 000
第 37 回資産 運用委員会	第 13 回大阪府 公募公債 (20 年)	2015. 9. 29	2035. 9. 28	100, 000	100, 000
第 39 回資産 運用委員会	リフトバンクグループ(株) 第 48 回無担保社債	2015. 12. 10	2022. 12. 9	50, 000	50, 000
第 40 回資産 運用委員会	第 4 回三井住友 フィナンシャルグループ 劣後債	2015. 12. 25	2030. 5. 29	205, 676	200, 000
第 40 回資産 運用委員会	SMBC 日興証券 クレジット債	2016. 1. 14	2023. 1. 23	100, 000	100, 000
	計			1, 058, 666	1, 052, 990

また、2016 年度においては基本財産の債券 2 銘柄が満期償還となるので、資産運用委員会にて検討のうえ効率的な再運用を図って行くものとする。

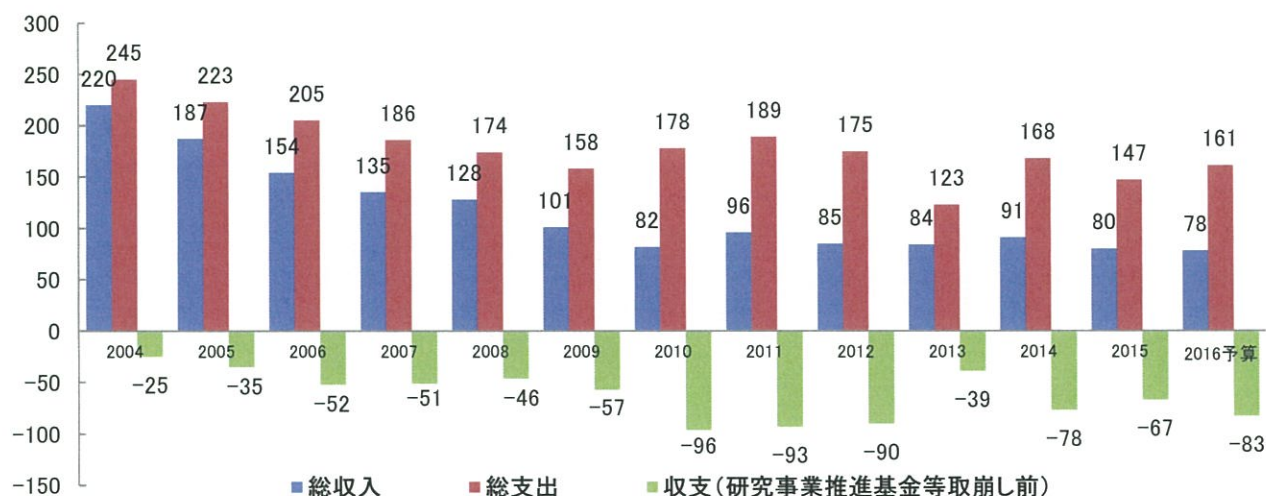
(2016 年度満期予定債券)

銘柄	元本 (円)	満期日
平成 18 年度第 1 回北九州市公債	100, 000, 000	2017. 3. 28

参考 1. 収支構造（収支計算書-資金増減-ベース）

- ・ 収支のマイナスギャップは、2004 年度から継続。
- ・ 安全性最重視の資金運用シフトにより、利息収入が低迷する中、支出の抑制に努めるも、研究事業推進基金の取崩による事業運営が継続。
- ・ 2016 年度は、収支差約 8,346 万 6 千円の計上を見込む。

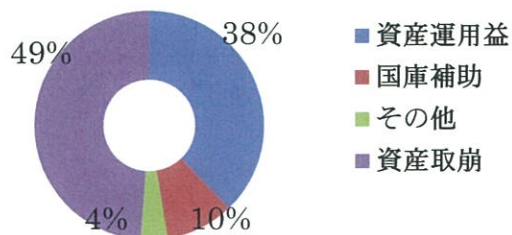
高等研 収支実績推移（単位：百万円）



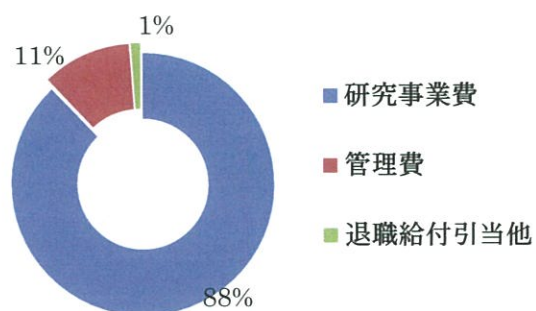
参考 2. 財団保有金融資産の推移と主要収入の推移

- ・ 収支構造としては、事業費支出（88%）と管理費支出（11%）が支出の大半を占めている。また、調達としては資産運用益が（38%）と国庫補助金（10%）のほか、49%は資産取崩によって支えられている財務構造にある。

調達構成比



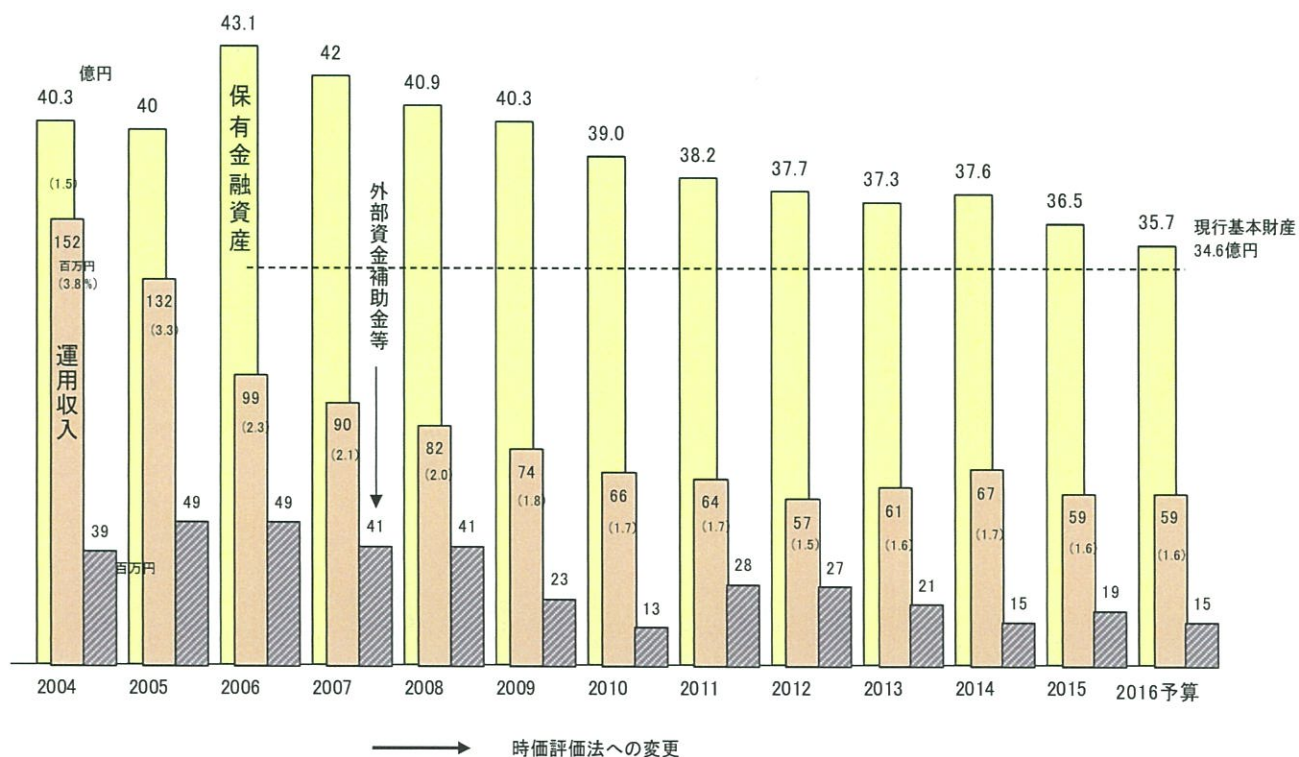
構成比



低金利状況が続く中、「資産運用基準」に則り収入の確保に努めているが、かつての利回り率 4.1%（2003 年度）の運用も、安全性最優先での運用の結果、2015 年度の利回り率は 1.6% の水準となり、運用収入は大幅に減少傾向が続いている。

現在保有している金融資産は 36 億 5 千万円であるが、この内、取崩可能な研究事業推進基金は 1 億 4,439 万 8 千円である。

保有金融資産、主要収入の推移



注 運用方針

格付機関:「A」評価のものとする。又、リスク管理の視点から「海外債券」から「国内債券」へ現状の保有 29 債券のうち、海外債券は 5 件、残る 24 件は国債、地方債、社債、仕組債等の国内債券に投資。

付属明細書 1

公益財団法人国際高等研究所 2015 年度事業報告Ⅱ．研究事業の推進

1. 基幹プログラム

(1) 将来の地球社会を考えた時の科学技術の在り方

研究会名を「21 世紀地球社会における科学技術のあり方研究会」とした。

①目的

現在、科学技術研究体制のグローバル化、デジタル技術の革新的進歩、社会経済が解決すべき課題の複雑化・グローバル化、社会経済的価値創造と科学技術研究の接近といった状況の下で、数百年のスパンで築かれてきた近代科学の方法とその思想的枠組みが大きな転換期を迎えている。この問題については世界の各所で様々な議論が行われているが、これらを歴史的かつ同時代的に俯瞰するとともに、学問とは何か、科学技術とは何か、大学とは何かといった根本的問題についても再検討する。その中で特に迫りくる有限資源の地球、深刻な環境破壊・汚染といった地球社会が直面している問題を前にして、科学技術活動をどのようにすべきかを具体的に検討することが大切である。そして世の中に問いかける活動をする。

②研究代表者

有本 建男 国際高等研究所副所長、政策研究大学院大学教授

③研究メンバー

小寺 秀俊 京都大学大学院工学研究科教授
大竹 暁 内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官
隠岐さや香 名古屋大学大学院経済学研究科教授
狩野 光伸 岡山大学大学院医歯薬学研究科教授
駒井 章治 奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科准教授
宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授

④研究実績

これまで5回の研究会を開催し、21 世紀の地球社会における科学技術のあり方に関する課題、新たな学問分野の所在について検討した。その内容を「世界・歴史・思想」「日本・市民」「学問・科学技術・大学」「科学者・科学コミュニティ」の4 カテゴリーに分け、“現状認識”と“未来像とその実現のための行動”について整理した。

また、若手研究者の対話、文部科学省若手官僚と研究者の対話、日本学術会議との共催によるアジア若手科学者会合を開催し、境界を越える新しい学術領域、科学技術とそれを取り巻く環境の課題・今後の方策等について議論を行った。

具体的には、「文科省若手官僚と研究者の対話」においては、若手官僚と研究会メンバーとが、科学技術とそれを取り巻く環境の課題・今後の方策について話し合った。予算史上主義、大衆迎合の風潮、短期的人事など特有の事情の中で、学問のフロンティアの開拓や学術領域の改善をどう進めるのか。今後も継続することとした。

「若手研究者の対話——境界を越える新しい学術領域の模索」においては、若手研究者が自らの専門性を磨きつつ、新しい学術領域の模索・開拓するための方策を話し合った。理想的な学問

空間、魅（学問の面白さ）の研究、の二つのテーマについて検討を継続することとした。

「アジア若手科学者会合（日本学術会議と共催）」においては、科学教育・科学外交・高齢終末期医療などの国際的かつ分野横断的テーマにおける課題を抽出、分野・文化・国家の違いを越えた課題解決の方策について話し合った。

⑤研究会等開催

第1回：2015年6月12日（金）15：00～17：30

第2回：2015年7月28日（火）13：00～16：30

第3回：2015年8月26日（水）11：00～15：00

第4回：2015年10月23日（金）10：00～11：30

第5回：2016年1月25日（月）12：30～14：30

関西圏若手研究者の対話：

2015年12月20日（日）、1月22日（金）、2月19日（金）、3月24日（木）

文科省若手官僚と研究者の対話：

2015年12月21日（月）、2016年3月25日（金）

(2) 循環型、定常経済社会の構築の必要性和その方策

①目的

人類にとって差し迫った課題である有限資源の地球を考えた時、資本の飽くなき富の追求という現代資本主義の形態のままで行けば、地球資源の枯渇を招き、貧富の差を拡大し、人類に早期の破滅をもたらすことは明らかである。したがって進歩発展という概念を越えて、定常的、循環的な経済、持続可能な社会を構築し、貧富の格差を出来るだけ縮小し、文化的な生活を保障する社会にしてゆくべきであろう。その姿とそこに軟着陸してゆくための方策を検討する。

そのためには循環ということの定義とその具体的内容を明確にすることが必要である。そして循環の度合い、すなわち循環率を計算できるようにし、これを各国、各社会、あるいは各分野に適用し、循環率の低い社会あるいは分野はどこに原因があるかを明らかにし、制度的、科学技術的に改善できるよう検討する。そのためには、種々の社会的、政治的な枠組みや規制、あるいは解決のための科学技術等を国際的に作ってゆく必要があり、これを政策的立場から検討する。

②研究代表者

佐和 隆光 滋賀大学特別招聘教授、京都大学名誉教授

③研究メンバー

一方井誠治 武蔵野大学工学部環境システム学科教授

加藤 博和 名古屋大学大学院環境学研究科准教授

倉阪 秀史 千葉大学法政経学部法政経学科教授

小西 哲之 京都大学エネルギー理工学研究所教授

佐々木典士 株式会社ワニブックス書籍編集部副編集長

高村ゆかり 名古屋大学大学院環境学研究科教授

④研究実績

研究代表者の植田和弘京都大学大学院経済学研究科教授（国際高等研究所研究企画推進委員）が体調不良により長期療養に入られたため、6月30日付にて研究代表者を取り消し、2016年度

の当該基幹プログラムの立ち上げを図るため、主導できる後任の人選を進めた。当初から候補にあがっていた佐和隆光氏（滋賀大学特別招聘教授、京都大学名誉教授）が、滋賀大学長を退かれるのを機に、新たな研究代表者として就任していただくことになり、環境経済学、国際法、環境政策、エネルギー科学等の専門家による研究体制を整えた。

(3) 多様な価値観を持つ社会や国家の平和的共存のための方策

研究会名を「多様性世界の平和的共生の方策」とした。

①目的

種々の考え方、多様な価値観、倫理観、宗教等を持つ人々や社会、国家が平和的に共存できない原因は何か。その原因を取り除くための方策、そこから平和的共存に到る道をどうすれば描けるかについて検討する。そのためには現在広く使われている経済活動の指標である GDP に代わる人間中心の価値観に基づく指標を検討し、これを世界的に議論するネットワークを構築する。ここでは有限の地球資源を大切にしたい循環型、定常経済社会と、価値観、倫理観、宗教等の違いを克服して人々が平和共存できるための方策という視点を重視する。

この課題は極めて困難なもののように思われるだろうが、人類はこれまで倫理、道徳、あるいは宗教などによって克服する努力をしてきた。類似の課題は既に世界の各所で取り上げられ議論されているので、まず、これらを集積し俯瞰的に検討する。寛容と協調、互惠の精神を基盤に持つ日本において検討することによって、他にない観点からの提案ができ、世界におけるこの種の議論をリードすることができるだろう。

②研究代表者

位田 隆一 国際高等研究所副所長、滋賀大学長

③研究メンバー

吾郷 真一 立命館大学法学部教授
大芝 亮 青山学院大学国際政治経済学部教授
高阪 章 関西学院大学国際学部教授
内藤 正典 同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科教授
中西 久枝 同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科教授
中西 寛 京都大学公共政策大学院教授
東 大作 東京大学大学院総合文化研究科准教授
福島安紀子 青山学院大学地球社会共生学部地球社会共生学科教授
星野 俊也 大阪大学大学院国際公共政策研究科教授
峯 陽一 同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科教授
最上 敏樹 早稲田大学政治経済学部教授
モジュタバ・サドリア 中央大学総合政策学部教授
モンテ・カセム 立命館大学国際平和ミュージアム館長
前田 直子 京都女子大学法学部准教授

④研究実績

研究は以下の4段階にて行う計画で、今年度は1)～3)を中心に進めた。1)「人間中心の価値観に基づく平和的共存のための方策」を概念としてどう捉えるか。2)人間中心の価値観に基づ

く「指標」とはどのようなものか。欧米中心の価値観ではなく、日本的な価値観、アジア、イスラム、アフリカといった様々な価値観を統合する新しい指標を検討する。3)既存の指標との相違、盛り込むべき要素などを考え、新しい指標の構築を試み、指標の活用可能性について検討する。4) 指標の具体的な内容とその背景にある考え方を、新しいコンセプトとして世界に発信していく。4回の研究会を開催し、キーコンセプトやキーワードの抽出、提言の枠組み・新たな指標作成に向けた検討を行った。

中心となるキー・コンセプトとして、「人間の尊厳」を設定した。また、キーワードとしては、「人間」「発展」、「アイデンティティ」、「他者と自己の関係」、「平和の再定義」、「現実には到達可能な目標と理想として望むべき目標」、「共生の意味」、「主観と客観」、「inclusive と exclusive」、「我々はどこに生きているのか：場所・環境・時間」、「自己と他者」、「人間の尊厳と平和的共生の関係」、「人間の安全保障の概念」、「日本からの発信」、「世代」、「主観の重要性」、「他者への配慮」を抽出し、「多様性世界の平和的共生」の提言枠組み案の提示、指標作成のためのチェックリスト、データ収集方法の検討、人々へのアンケート調査票案の作成を行った。今後、新たな指標を作成し、世界に発信するための基盤を作った。

⑤研究会開催

- 第1回 : 2015年10月3日 (土) 13:00~18:00
 10月4日 (日) 10:00~18:00
第2回 : 2015年11月15日 (日) 13:00~18:00
第3回 : 2015年12月26日 (土) 10:00~18:00
 12月27日 (日) 10:00~18:00
第4回 : 2016年2月11日 (木) 13:00~18:00

(4) 「けいはんな未来」懇談会

①目的

けいはんな学研都市は最初の街びらきから30余年が経過し、およそ10年ごとに目指すところを設定し、今日までに3つのステージを経て進化を重ねてきたが、2016年度から次の10年を築く新たなステージを迎える。けいはんな学研都市では、土地・道路の造成、研究施設の誘致・建設といったハード面の整備は継続しつつ、この街の未来に向けては、この30年間の様々な変化を反映しながらも、「当初のミッションをいかに実践していくか」というソフト面も充実させるべき時期に移行してきている。

30年先となれば、地球資源の枯渇、人口や環境問題などがより深刻になっており、これまでのような進歩発展史観は成り立たず、資源の循環的で効率的な利用、定常経済社会の実現を目指していくことになるだろう。そういった未来に軟着陸していくため、科学技術や経済、産業、その他社会活動が如何にあるべきかについて真剣に議論し、検討することが求められている。

そのような背景のもと、「何を研究するかを研究する」ために設立された高等研として、「けいはんな学研都市の30年後に向けたコンセプト」の構築のために英知を結集していくことがまさにその使命であると捉え、「けいはんな未来」懇談会（以下、「未来懇」）を主催することとした。けいはんな学研都市のこれから10年の計画を作成するタイミングで、その活動と並行して、30年先の未来における社会のありようを見極めバックキャスティングにこの街のあるべき姿を描く未

来懇により、この街の未来に寄与することを目的とする。

②研究代表者

松本 紘 国際高等研究所副所長、理化学研究所理事長

③研究メンバー

荒井 正吾 奈良県知事

依田 高典 京都大学大学院経済学研究科教授・副研究科長

大竹 伸一 西日本電信電話株式会社相談役

柏原 康夫 関西文化学術研究都市推進機構理事長、株式会社京都銀行相談役

平田 康夫 株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）代表取締役社長

山下 晃正 京都府副知事

④研究実績

7回の会合を通し、けいはんな学研都市に関する基礎情報を基に現状を把握し、街づくりに関連する幅広い要素を対象に、30年後を見据えたバックキャスティングな視点から課題を抽出した。「研究・開発」「産業」「文化・芸術」「教育」「住民・生活」「都市基盤」という軸を踏まえた上で、都市基盤整備のあり方や優先順位、リソース確保の考え方について議論し、けいはんな学研都市の30年後のあり方について中間報告を取りまとめた。

⑤研究会開催

第1回 : 2015年7月6日 (月) 10:00～12:00

第2回 : 2015年7月27日 (月) 10:00～12:00

第3回 : 2015年9月7日 (月) 10:00～12:00

第4回 : 2015年9月28日 (月) 10:00～12:00

第5回 : 2015年10月19日 (月) 14:30～16:30

第6回 : 2016年2月8日 (月) 10:00～12:00

第7回 : 2016年3月14日 (月) 10:00～12:00

2. 研究プロジェクト

(1) 領域横断型の生命倫理プラットフォームの形成に向けて（2015 年度採択）

①目的

近年、社会的に注目されている課題として、出生前診断や代理母を含む生殖補助医療、終末期医療、再生医療研究、医学研究者の不正行為など、いわゆる生命倫理(bioethics)の諸課題がある。今日こうした問題は国際的にも日本においても重要な課題であるものの、とりわけ日本においてはこれらのテーマに関する領域横断型の研究・教育体制作りが遅れてきた。そこで本プロジェクトでは、国際的な生命倫理学の研究・教育拠点を日本に作るべく、その基盤となる生命倫理プラットフォームの形成を図ることを目的とする。

②研究代表者

児玉 聡 京都大学准教授

③研究メンバー

伊勢田哲治 京都大学大学院文学研究科准教授
位田 隆一 同志社大学グローバルスタディーズ研究科特別客員教授
一家 綱邦 京都府立医科大学医学部医学科講師
木村 敦子 京都大学大学院法学研究科准教授
齋藤 信也 岡山大学保健学科教授
佐藤 恵子 京都大学医学部附属病院特定准教授
下妻晃二郎 立命館大学生命科学部教授
鈴木 美香 京都大学 iPS 細胞研究所特定研究員
竹之内紗弥香 京都大学大学院医学研究科助教
鶴山 竜昭 京都大学大学院医学研究科准教授
戸田聡一郎 京都大学大学院医学研究科特定助教
長尾 式子 神戸大学保健学研究科助教
中山 茂樹 京都産業大学法科大学院教授
錦織 宏 京都大学大学院医学研究科准教授
野崎亜紀子 京都薬科大学薬学部准教授
服部 高宏 京都大学国際高等教育院教授
東島 仁 山口大学国際総合科学部講師
松村 由美 京都大学大学院医学研究科准教授
三成 寿作 大阪大学大学院医学系研究科助教
田中創一朗 京都大学大学院文学研究科博士後期課程

④研究実績

関西圏を中心とした(とはいえ、関西圏に限定されない)学際的な「生命倫理プラットフォーム」の構築が大きく進展した。通常の研究会とは異なりグループディスカッションの手法を多用することで、学際的な交流と研究理解が進んだ。また、第2回研究会では、外国人研究者も含め、短期間ではあるが国際高等研究所の宿泊施設に滞在して寝食を共にすることで、パーソナルな結びつきも深まった。課題としては、特に国際ワークショップの場合には英語での深いディスカッションを行うためにはかなりの時間が必要なこと、生命倫理の課題に関する日本

からの国際的な発信をどのように行うかを考える必要があること、また事前の準備や当日の運営、およびプログラムの作成について国際高等研究所の事務局とより緊密に連携する必要があることなどが明らかとなった。

⑤研究会開催

第1回：2015年8月4日（火）～5日（水）

第2回：2015年11月22日（日）～23日（月）

(2) 人工知能に関する問題発掘型対話基盤と新たな価値観の創出（2015年度採択）

①目的

1) 人文・社会学者による ELSI 調査グループ、2) 人工知能研究者による AI 社会応用調査グループ、3) 科学技術社会論や科学コミュニケーションを専門とする対話基盤設計グループを設け、人工知能の社会的影響を議論し、(a) 政府による干渉や産業による利益誘導に左右されない、異分野間の対話・交流を促すための媒体や基盤を構築し、(b) 人工知能の目指すべき共通アジェンダや社会の未来ビジョンを設計し、技術開発・実装時の新設計基準や規範・倫理・制度に関する価値観を提案することを目的とする。

②研究代表者

江間 有沙 東京大学大学院総合文化研究科
教養学部附属教養教育高度化機構特任講師

③研究メンバー

秋谷 直矩 山口大学国際総合科学部助教
市瀬龍太郎 国立情報学研究所情報学プリンシプル研究系准教授
大家 慎也 神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程
大澤 博隆 筑波大学システム情報系知能機能工学域助教
大谷 卓史 吉備国際大学アニメーション文化学部准教授
神崎 宣次 滋賀大学教育学部准教授
久木田水生 名古屋大学大学院情報科学研究科 准教授
久保 明教 一橋大学大学院社会学研究科専任講師
駒谷 和範 大阪大学産業科学研究所教授
西條 玲奈 京都学園大学経営経済学部非常勤講師
田中 幹人 早稲田大学政治経済学術院准教授
服部 宏充 立命館大学情報理工学部准教授
本田康二郎 金沢医科大学一般教育機構講師
宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授
八代 嘉美 京都大学 iPS 細胞研究所上廣倫理研究部門特定准教授
山下 倫央 産業技術総合研究所サービス工学研究センター主任研究員
吉澤 剛 大阪大学大学院医学系研究科准教授

④研究実績

本年度は各研究分野の問題意識や全体像を共有し、それぞれの価値観のすり合わせや整理を行うために、(1)AIR が提案する人工知能の設計哲学の構築とコンセプト・ペーパーの構想、(2)人

工知能研究者や人文・社会学研究者などの人工知能に対する態度や考えを示せる尺度の作成、そして(3)過去の文理融合プロジェクトに係った先生方へのインタビュー調査の実施を開始することで合意にいたった。(1)のコンセプト・ペーパーについては最終年度に向けて議論を継続しており、本年度は主に(2)尺度の作成を具体化するためのWEBアンケート調査と、(3)インタビュー調査の実施を行った。

⑤研究会開催

グループミーティング:

第1回 : 2015年8月21日 (金)

第2回 : 2015年9月18日 (金)

第3回 : 2015年10月26日 (月)

研究会:

第1回 : 2015年9月3日 (木)

第2回 : 2016年2月8日 (月) ~9日 (火) @長崎ハブステイボス「変なホテル」

(3) ネットワークの科学 (2014年度採択)

①目的

ネットワークとして見なされる対象・現象や現象は多岐にわたり、そこでは人、物、情報、エネルギー等が絶え間なく流れている。ネットワークのダイナミクスの研究が進展することで、ネットワークの科学は社会のニーズにいつそう応える科学に成長すると期待されるが、理論と現実とのギャップは大きい。特に、ネットワークのレジリエンス(回復力、打たれ強さ)は現代社会から解明が強く求められている。本研究は、理論研究者と個別分野の研究者が一堂に会してネットワークのより深い理解と新たな問題の発掘を目指す。

②研究代表者

郡 宏 お茶の水女子大学准教授

増田 直紀 ブリストル大学上級講師

③研究メンバー

岩田 覚 東京大学大学院情報理工学系研究科教授

江崎 貴裕 東京大学先端科学技術センター学振PD

翁長 朝功 京都大学大学院理学研究科博士課程

樺島 祥介 東京工業大学大学院総合理工学研究科教授

小林 亮太 国立情報学研究所情報学プリンシプル研究系特任助教

近藤 倫生 龍谷大学理工学部教授

高口 太朗 国立情報学研究所特任研究員

高松 瑞代 中央大学理工学部情報工学科准教授

高安美佐子 東京工業大学大学院総合理工学研究科准教授

寺前順之介 大阪大学大学院情報科学研究科准教授

中垣 俊之 北海道大学電子科学研究所教授

藤本 仰一 大阪大学大学院理学研究科准教授

吉田 悠一 国立情報学研究所情報学プリンシプル研究系准教授

渡辺 努 東京大学大学院経済学研究科教授

④研究実績

ネットワークが関係する日本特有の社会問題とその解決方法の可能性に特に焦点をあてて研究議論を行った。そのような問題の例としては、地震、他の災害、人口減少などが挙げられる。これらの問題は、すでに政治家、知識人、研究者などが取り組んでいる課題であるが、本プロジェクトは、これらの問題への、広い意味でのネットワーク関連の手法を用いた数理的アプローチを行うこと、および、データドリブンなアプローチを議論することを特徴とする。

問題解決に向けてとりうるアプローチとしては、最適化、機械学習、頑健性や resilience の手法や概念が挙げられよう。更に、これまでの研究会を通して様々な研究のシーズが発見されたが、それらをより具体化させることを目標とした話題提供を企画した。災害や人口減少といった社会問題を視野にいった話題提供を行うことによって、異なる視点からネットワーク科学をとらえる機会を得ることができた。その過程で、たとえばレジリエンスの定式化といった根本的問題を議論できたことも貴重な経験となった。

⑤研究会開催

第1回 : 2015年8月19日(水)～20日(木)

第2回 : 2016年2月29日(月)～3月1日(火) @熱海ニューフジヤホテル

(4) 精神発達障害から考察する decision making の分子的基盤 (2014年度採択)

①目的

自閉症・精神発達遅滞等の発達障害の中核をなす意思決定、コミュニケーション能力の障害について、その神経科学的基盤を解明することは、発達障害の治療法、予防法の開発にとってきわめて重要である。本研究は、ヒトの精神発達障害の分子病態機序を読み解くアプローチ、実験動物を用いて脳の高次機能を読み解くボトムアップアプローチ、霊長類を用いたトップダウンアプローチ、という3つのアプローチが交叉する領域に注目し、意思決定機構・コミュニケーション機構等における障害の分子機構を明らかにすることを目的とする。

②研究代表者

辻 省次 東京大学医学部教授

③研究メンバー

磯田 昌岐	関西医科大学医学部准教授
井ノ口 馨	富山大学大学院医学薬学研究部教授
入来 篤史	理化学研究所脳科学総合研究センターシニアチームリーダー
岡本 仁	理化学研究所脳科学総合研究センター副センター長
尾崎 紀夫	名古屋大学大学院医学研究科教授
影山龍一郎	京都大学ウイルス研究所教授
川人 光男	ATR 脳情報通信総合研究所所長
北澤 茂	大阪大学大学院生命機能研究科教授
坂上 雅道	玉川大学科学研究所応用脳科学研究センター教授
坂野 仁	福井大学医学部特命教授・東京大学名誉教授
東原 和成	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
内匠 透	理化学研究所脳科学総合研究センターシニアチームリーダー

松崎 秀夫	福井大学子どものこころの発達研究センター教授
宮川 剛	藤田保健衛生大学総合医科学研究所教授
山田真希子	放射線医学総合研究所分子イメージング研究センター
吉川 武男	理化学研究所脳科学総合研究センターシニアチームリーダー
渡邊 大	京都大学大学院医学研究科教授

④研究実績

ゲノム科学の最近の飛躍的な発展を、ヒトの発達障害の研究にどのように応用するかという点や、脳の機能画像研究がヒトの脳機能解析にどのように迫ることができるのか、神経系の可塑性が、意志決定にどのように関与するのか、実験動物を用いた脳研究の研究パラダイムなどについて、重点的に研究を進めた。また、自閉症の患者の非侵襲的脳機能解析について研究実績のある、ATR 脳情報通信総合研究所の川人光男氏を招待して resting state functional connectivity MRI を用いた自閉症の脳病態の研究成果の発表をしていただき、ボトムアップアプローチとトップダウンアプローチの研究の融合による学際的な研究の発展を目指した。

⑤研究会開催

第1回 : 2016年1月30日(土)～31日(日)

(5) 生命活動を生体分子への修飾から俯瞰する (2014年度採択)

①目的

タンパク質、DNA、脂質などの生体高分子は化学修飾によって機能発現が調節されている。修飾する因子、様式は多様で、それによって機能制御メカニズムも異なるが、生化学的な視点からは多くの共通点も存在する。本研究では、生体高分子の修飾に関して従来は相互の接触が十分ではなかった研究者が一堂に会し、修飾の特徴、役割の観点から多様な生命現象の制御機構について議論し、生命科学に新たな視点を提供することを目指す。

②研究代表者

岩井 一宏 京都大学大学院医学研究科教授

③研究メンバー

五十嵐和彦	東北大学大学院医学系研究科教授
石濱 泰	京都大学大学院薬学研究科教授
稲田 利文	東北大学大学院薬学系研究科教授
大隅 良典	東京工業大学特任教授
木下タロウ	大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授
田中 啓二	東京都医学総合研究所・所長
白川 昌宏	京都大学大学院工学研究科教授
鈴木 聡	九州大学生体防御医学研究所教授
仲野 徹	大阪大学大学院生命機能研究科教授
西田 栄介	京都大学大学院生命科学研究科教授
吉田 稔	理化学研究所吉田化学遺伝学研究室主任研究員
山本 雅	沖縄科学技術大学院大学教授

④研究実績

14年度の成果を踏まえ以下の研究計画の推進を目指した。

- ・複数の修飾が階層的に協調して制御される生命現象とその制御におけるそれぞれの修飾の役割。種々の修飾が特定の生命現象の制御に関与できるメカニズムなど、修飾が織りなす生体制御メカニズムの包括的な理解を進める。
- ・人為的修飾によって内在性のタンパク質の機能をモニターする可能性について考察する

本年度の研究会によって、生体高分子の修飾が複雑に絡み合うことによって多くの生命現象が制御されていることが明確となった。また、内在性のタンパク質の標識が可能であり、その標識を用いて種々の生命現象における分子の動態・役割が解析可能であることが明確となった。

⑤研究会開催

第1回：2016年2月8日（月）～9日（火）

(6) 設計哲学—俯瞰的価値理解に基づく、人工財の創出と活用による持続可能社会を目指して— (2014年度採択)

①目的

人間社会は歴史的に多種多様な人工財（モノ、コト、サービス、インフラ、組織、仕組み、社会、法体系など）を創出・構成してきた（即ち広義の設計とその利用）。近年、設計を取り巻く諸環境の急速な変貌に伴い、それに適応した社会の価値観に基づく設計の進化が求められている。本研究では、社会の価値観と設計との相互の関係を俯瞰し、今後の設計の在り方を含む設計倫理の在り方を検討する。ケーススタディとして、日本と発展途上国における人工財にまつわる環境問題を想定し、両社会を比較することで社会の価値観と設計との相互の関係性を明示化することを試みる。

②研究代表者

梅田 靖 東京大学大学院工学系研究科教授

③研究メンバー

岩田 一明 大阪大学名誉教授
植田 和弘 京都大学大学院経済学研究科教授
上須 道德 大阪大学環境イノベーションデザインセンター特任准教授
荻阪 直行 京都大学名誉教授
小野里雅彦 北海道大学大学院情報科学研究科教授
思 沁夫 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授
住村 欣範 大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授
田中 直 特定非営利活動法人 APEX 代表理事
中島 秀人 東京工業大学大学院社会理工学研究科教授
服部 高広 京都大学国際高等教育院教授
平田 収正 大阪大学大学院薬学研究科教授
堀 浩一 東京大学大学院工学系研究科教授
村田 純一 立正大学大学院文学研究科教授、東京大学名誉教授

④研究実績

本研究プロジェクトは、文化人類学を背景とするメンバー、工学を背景とするメンバー、その他、環境経済学、化学技術史学、科学哲学、心理学などを背景とするメンバーから学際的に構成されており、初年度（2014 年度）は、これら多様な背景を持つメンバー間での問題の共通認識を得ることが最大の課題であった。事例を持ち寄った話題提供と関連する密度の濃い議論を実施した結果、期待以上に問題の共通認識を得ることができた。それは、「途上国・中進国の中で、技術とその発露たる人工財がその『発展』にどう関わって行けば良いのか」という課題であり、本研究プロジェクトが長期的な目標とする「設計倫理」の一つの端的な表現形態であると捉えている。

今年度は、「途上国、新興国における技術の在り方」「途上国、新興国における技術への付き合い方」「途上国、新興国における設計の在り方」などについて、更に事例に関する話題提供により議論を深めると同時に、書籍の骨格をなす設計倫理問題の基本的な枠組に関して議論を進めた。また、最終年度に書籍を出版することを目標に活動することとした。

⑤研究会開催

- 第 1 回 : 2015 年 6 月 26 日 (金) ~27 日 (土)
- 第 2 回 : 2015 年 10 月 2 日 (金) ~3 日 (土)
- 第 3 回 : 2015 年 12 月 11 日 (金) ~12 日 (土)

(7) 総合コミュニケーション学 (2014 年度採択)

①目的

従来社会科学的な研究対象であったコミュニケーションの問題を、生物学、情報科学、経済学、経営学、環境科学、物理学、複雑系科学、科学哲学等の諸分野の研究者間で共有し、幅広い分野の研究者が国際高等研究所における研究会・ワークショップに参加し議論を行う。そのような文理融合の学際的・包括的な研究交流を通じて総合コミュニケーション学の確立を目指し、コミュニケーションに関連する様々な社会問題の解決を図る。

②研究代表者

時田恵一郎 名古屋大学大学院情報科学研究科教授

③研究メンバー

上原 隆司	静岡大学創造科学技術大学院特任助教
江守 正多	国立環境研究所地球環境研究センター気候変動リスク評価研究室室長
大平 徹	名古屋大学大学院多元数理研究科教授
小西 哲郎	名古屋大学大学院理学研究科准教授
阪上 雅昭	京都大学大学院人間環境学研究科教授
佐々木 顕	総合研究大学院大学先導科学研究科教授
笹原 和俊	名古屋大学情報科学研究科助教
佐藤 哲	総合地球環境学研究所教授
田中 沙織	大阪大学社会経済研究所特任准教授
戸田山和久	名古屋大学大学院情報科学研究科教授
橋本 敬	北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科教授

早川 美德	東北大学教育情報基盤センター教授
福永 真弓	大阪府立大学大学院人間社会学研究科准教授
藤本 仰一	大阪大学大学院理学研究科准教授
丸山 康司	名古屋大学大学院環境学研究科准教授
八代 嘉美	京都大学 iPS 細胞研究所主任研究員

④研究実績

生物と人間の様々な形態のコミュニケーションに関する理論・実証研究をレビューしつつ、新たな共同研究の道を探った。第1回研究会は日本数理生物学会/日中韓数理生物学コロキウム合同大会との共催により、“Biological and General Communications”をテーマに開催した。オーストリア国際応用解析研究所 Ulf Dieckmann 氏による「誤解や不信を越えた人間関係の構築に向けた科学の寄与」に関する講演の後、生物やヒトのコミュニケーションについて、生物学者、社会学者、数理学者により議論を行った。第2回は、プロジェクトメンバーの他に、人工生命やロボティクス研究分野における世界的権威、北海道でツルの双方向ダンスに関するフィールド調査研究者に招待講演をしていただいた。これらを通し、「コミュニケーションにより結ばれるシステム」に対する研究の重要性がクローズアップされていく可能性を見出すことができた。

⑤研究会開催

第1回	: 2015年8月26日 (水)	@同志社大学
第2回	: 2016年3月3日 (木) ~ 4日 (金)	@名古屋大学

(8) 分子基盤に基づく生体機能への揺らぎとダイナミックネットワークの解明 (2013年度採択)

①目的

DNA、RNA、タンパク質、膜分子の機能、構造変化などの化学反応と共に起こる分子間相互作用の分子論的機構や、ダイナミクス・分子認識を含めた生体内の化学反応過程を、揺らぎを含めた動的立場で理解し、生命をもたらす機能の本質であるネットワークを、分子を基盤とした言葉で明らかにする。このために、分野の垣根をなくした新しい先端領域を作り発展させることを目的とする。こうした試みにより、分子の視点で新たな疾病治療法などの応用が開発されることを期待する。

②研究代表者

寺嶋 正秀	京都大学大学院理学研究科教授
-------	----------------

③研究メンバー

加藤 晃一	自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター教授
岡田 誠治	熊本大学エイズ学研究センター教授
鈴木 元	名古屋大学大学院医学系研究科分子腫瘍学分野講師
佐藤 啓文	京都大学大学院工学研究科教授
平岡 秀一	東京大学工学研究科教授
上久保裕生	奈良先端科学技術大学院大学物質創成科学研究科准教授
芳坂 貴弘	北陸先端科学技術大学院大学マテリアルサイエンス研究科教授
佐藤 宗太	東京大学大学院工学系研究科講師
岡本 祐幸	名古屋大学大学院理学研究科教授
稲垣 直之	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科准教授

④研究実績

生体分子の反応を理解するために、生体分子反応に揺らぎがどのように関わっているのか、その揺らぎというダイナミクスをどのように利用して機能を作り出しているのかなどを明らかにするための成果報告会を開催した。これまでの研究会によって、種々の異なった分野の一線で活躍されている研究者間の交流が行われ、同じ現象に対しての異なった言葉やアプローチについての相互理解が深まった。また、それぞれの分野で何が大きな問題となっているのか、何がブレークスルーにつながるのかと言う点についても、お互いの理解が深まった。

⑤研究会開催

第1回 : 2016年2月18日(木)～19日(金)

(9) クロマチン・デコーディング (2013年度採択)

①目的

ゲノムDNAと多数の蛋白質が集合してできた複合体クロマチンの研究は、特定のモデル生物と細胞種を研究対象とし各論的に行われてきたため、それらの統合的理解が求められている。本研究では、原子・分子の微小レベルから、ナノ・マイクロメートルの巨視的レベルに至るまでの多層階層をなすクロマチン制御機構を総合的に理解することを目指す。

②研究代表者

石川 冬木 京都大学大学院生命科学研究科教授

③研究メンバー

有吉真理子	京都大学工学研究科特任研究員
五十嵐和彦	東北大学大学院医学系研究科教授
石井 俊輔	理化学研究所石井分子遺伝学研究室上席研究員
岩間 厚志	千葉大学大学院医学研究院教授
上田 泰己	東京大学大学院医学系研究科教授
太田 邦史	東京大学大学院総合文化研究科教授
影山龍一郎	京都大学ウイルス研究所物質－細胞統合システム拠点教授
木村 宏	東京工業大学大学院生命理工学研究科教授
胡桃坂仁志	早稲田大学理工学術院先進理工学部研究科教授
定家 真人	京都大学大学院生命科学研究科助教
塩見美喜子	東京大学大学院理学系研究科教授
白髭 克彦	東京大学分子細胞生物學研究所教授
眞貝 洋一	理化学研究所主任研究員主任研究員
立花 誠	徳島大学疾患酵素学研究センター教授
樽本 雄介	京都大学大学院生命科学研究科助教
中西 真	名古屋市立大学大学院医学研究科教授
中山 潤一	名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科教授
西田 栄介	京都大学大学院生命科学研究科教授
平岡 泰	大阪大学大学院生命機能研究科教授
深川 竜郎	国立遺伝学研究所分子遺伝研究部門教授

舛本 寛 (公財) かずさDNA研究所細胞工学研究室室長
村上 洋太 北海道大学大学院理学研究院科学部門教授
本橋ほづみ 東北大学加齢医学研究所遺伝子発現制御分野教授
森川 耿右 京都大学物質－細胞統合システム拠点客員教授

④研究会開催

第1回 : 2016年12月19日 (土) ～20日 (日)

3. 研究企画推進会議

(1) 目的

研究事業の企画及び円滑な推進を図るため、所長の諮問機関として、研究企画推進会議を置く。会議は、以下の職務を行う。

- ・研究所の研究活動に係る諸課題に関する所長の諮問に応じた検討、所長への建議あるいは助言・提案
- ・その他研究事業の企画及び円滑な推進を図るために必要な事項

(2) 委員名簿

榊 裕之	豊田工業大学学長・東京大学名誉教授 ※委員長
植田 和弘	京都大学大学院経済学研究科教授
小泉 潤二	大阪大学未来戦略機構特任教授・大阪大学名誉教授
小寺 秀俊	京都大学大学院工学研究科教授
佐伯 啓思	京都大学名誉教授
竹内佐和子	文部科学省顧問
西尾章治郎	大阪大学総長
西村いくこ	京都大学大学院理学研究科教授
西本 清一	京都高度技術研究所理事長・京都市産業技術研究所所長・京都大学名誉教授
廣岡 博之	京都大学大学院農学研究科教授
三嶋 理晃	京都大学大学院医学研究科教授
安富 歩	東京大学東洋文化研究所教授

(3) 会議実績

各委員の専門に基づく研究事業全般に対するご意見を頂くこととした。主な意見は以下の通り。

- ・若手官僚との対話は重要。官僚の方々の視野拡大、大局観から物事を考えることを促す。
- ・40代の若手研究者の多忙は改善が必要。対話の結果を若手にどうフィードバックするのか。
- ・2、3年で成果を求めるのではなく、10～20年体制への移行をメッセージとして出してほしい。
- ・若手が長期的視点やバックキャストで物事を考える姿勢を持つためにどうしたらよいのか。
- ・近代の概念に基づく議論は近代を脱出できない。言語体系の次元から変える必要。英語の翻訳語をもとにした議論では、英語で築かれた概念に勝てない。
- ・経済活動への反映のみを一つの価値として重視しすぎることに、現代の問題がある。多様な価値の認識が専門家にとって活力となる。
- ・問題の可視化、外部との対話は重要。このような活動が資金源にもつながる可能性がある。
- ・我々学者は文章も発言も英訳語で表現するが、普通の日常言語に連続した表現で議論を構築する努力が必要なのではないか。高等研はそのあたりをテーマにしてもいいのではないか。
- ・他の地域と異なる思考パターンを持つ日本人、その独自性を問われている。
- ・指標を考えると、個人と国家はシームレスにつながる一つの指標なのか、別々の指標なのか。
- ・30年後にこの地域が発展するためには、ジェンダーバランスも今と異なる必要があるのではないか。

- ・ けいはんな学研都市は京都にも大阪にも奈良にも出勤でき、研究者夫妻が生活を共にしながらキャリアを積むことができる。そのようなメリットを生かし、デュアルキャリア（新たに赴任した研究者に対して、彼らのパートナーのために仕事を探す仕組み）進めたらどうか。

(4) 会議開催

第1回 : 2015年7月25日 (土) 14:00～16:00

第2回 : 2015年12月19日 (土) 9:30～12:30

以上

付属明細書 2

公益財団法人国際高等研究所

2015 年度事業報告Ⅲ. ソーシャル・コミュニケーション活動の企画・実行

1. 「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ"ゲーテの会"」事業概要と開催実績

知的連携のための土壌醸成及び知的連携の促進を図るために、「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ"ゲーテの会"」を 2013 年度に立ち上げ、原則として毎月の満月の夜に公開セミナーを企画・開催している。現在では、けいはんな学研都市に立地する法人や企業の関係者、近隣住人など、広く一般を対象とし、40～50 名を上限として参加者を募っているが、リピーターも増え、人的ネットワークに基づいて京都市内や大阪市内など、より広範囲の地域からの参加者も認められるようになった。

2013 年度は「近代科学はこのままでいいのかーゲーテが描くもう一つの近代ー」や「近代科学をいかにして超えるかー自然と人間との関係性を考えるー」などの視点の下に、毎回講師を招き、話題提供の後に懇談の機会を持ち、講師との活発な質疑応答や意見交換を行う形態をとった。当初は、諸内外の有志によって立ち上げ、かつ運営にあたった。年度後半からは正式に高等研の試行事業として実施することとした。2014 年度は、主テーマを「未来社会はいかにあるべきかー人類の未来と幸福を考えるー」、「未来社会をいかに拓くかー未来社会を担う新しい人間像を探るー」として展開した。

2015 年度は、ゲーテの会を発足させて 3 年目を迎え、「日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて」をテーマに掲げて、日本の近代化を導いた偉人の思想、行動の光と影を追う企画を展開した。

2015 年度の活動実績は下記のとおりである。

(1) 第 21 回：2015 年 4 月 3 日（金）

テーマ：未来社会をいかに拓くかー未来社会を担う新しい人間像を探るー（Part V）

講演：菩薩の心

講師：北河原 公敬 華嚴宗大本山東大寺長老・東大寺総合文化センター総長

内容：東北大震災から 4 年が経ち、この大震災から私たちは自然の猛威を思い知らされた。未曾有の自然災害と向き合ったことで、これからの私たちの生き方が問われていると考える。この問いに答えるべくキーワードとして菩薩の心を取り上げ、参加者と共に意見交換した。

参加者：50 名

(2) 第 22 回：2015 年 5 月 12 日（火）

テーマ：日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて

ー日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追うー

身边に眼差しを向け、“文理融合”の世界に遊んだ人物（Part I）

講演：寺田虎彦の挫折と誇りー寺田物理学から学ぶものー

講師：池内 了 総合研究大学院大学名誉教授

内容：寺田寅彦が亡くなって 2015 年でちょうど 80 年になる。彼の人気は衰えないが、彼がノーベル賞寸前までいていたがブラッグ父子との競争に負けて一種の

挫折を味わったこと、それ以後は科学の見方を変えて「風土の科学」（今日で言う「複雑系の科学」）に傾注するようになったこと、同時に世界一流であることを意識した誇りも併せて持って研究を続けたことなどを明らかにした。それが彼の文理融合的発想の根源であり、そこから学ぶべきことが多くあることを説いた。

参加者：50名

(3) 第23回 2015年6月4日（木）

テーマ：日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて

－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－
－身近に眼差しを向け、“文理融合”の世界に遊んだ人物

（Part II 思想・文学分野）

講演：漱石と日本の近代化の矛盾

講師：佐伯 啓思 京都大学名誉教授

内容：明治の文豪、夏目漱石は英国留学から帰国後に、いくつかの講演を行った。講演で、漱石は、日本の表面的で即席の文明化（西欧化）を批判した。その後、漱石は、彼なりの個人主義を唱えたり、また、最後には禅的な境地に救いを求めたりもした。この漱石の葛藤は、明治に始まった西欧模倣の日本の近代化のひとつの典型といつてよいと考えられる。日本の近代化は、西欧的な学問や知識を身につけるところから始まり、そこに自我という意識が生まれてくる。しかし、そうすると、「日本的なもの」が見失われ、この自我もきわめて頼りないものになってしまう。漱石を導きの糸にしつつ、近代日本の知識人が直面した矛盾を考察した。

参加者：45名

(4) 第24回 2015年7月2日（木）

テーマ：日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて

－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－
－身近に眼差しを向け、“文理融合”の世界に遊んだ人物（Part III）

講演：儒医山本亡羊とオジギソウー本草博物学から文理融合を考えるー

講師：松田 清 京都大学名誉教授

内容：江戸時代に発達した本草博物学は、同時代の西欧博物学のような自然神学的な背景を持たない観察科学的性格と、古典理解のための名物学的性格の両面を有するもので、文理融合の学、あるいは詩と真実の知的な探求であったと考えられる。18世紀後半から19世紀後半に至る京都の本草博物学の一大拠点の土蔵から発見された資料群から渡来植物のオジギソウに関する資料を選び、伝統的な文理融合の実態を考察し、意見交換した。

参加者：33名

(5) 第25回：2015年7月30日（火）

テーマ：日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて

－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－
－世界の中の日本。科学・文化の諸相に彼我の風土の違いを発見した人物

（Part I 科学・技術分野）

講演：湯川の戦後ー科学と国民国家ー

講師：佐藤 文隆 京都大学名誉教授

内容：日本人として初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士は、科学者としてかつて経験したことがないヒーロー（国家主義の幻滅を味わった国民の新たな統合

のシンボル)として国民の前で生きることを意識せねばならなかった。冷戦化の中での急激な経済成長、湯川博士の希望と苦悩とはどんなものだったのかを語って貰い、意見交換した。

参加者：45名

(6) 第26回：2015年9月1日(火)

テーマ：日本の未来を拓くよすが(抛)を求めて

－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

世界の中の日本。科学・文化の諸相に彼我の風土の違いを発見した人物

(PartⅡ政治・経済分野)

講演：伊藤 博文の遺産

講師：瀧井 一博 国際日本文化研究センター教授

内容：近年の伊藤博文の再評価に基づき、伊藤が真に考え目指そうとした日本国家の姿はどのようなものだったのか。伊藤を政治家ではなく現代にも通じる思想家として捉え直して、伊藤の思想を読み解くために「憲法」、「議会政治」、「文明社会」の三つのテーマから考察し、現代日本における伊藤の遺産について考え、意見交換した。

参加者：48名

(7) 第27回：2015年9月28日(月)

テーマ：日本の未来を拓くよすが(抛)を求めて

－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

世界の中の日本。科学・文化の諸相に彼我の風土の違いを発見した人物

(PartⅢ思想・文学分野)

講演：福澤諭吉における「公」と「私」

講師：猪木 武徳 青山学院大学大学院特任教授

内容：「友情」という概念を、西洋思想の中の「公」と「私」の視点から考察するために、福澤諭吉『明治十年丁丑公論』を取り上げ、一般に日常用いられる「友情」という言葉と比較しつつ論じた。その際、福澤諭吉が、西郷隆盛という人物、あるいは西郷の思想なり政治家としての生き方をどう見ていたかということに焦点を合わせ、「公智・公德としての友情」がどのように健全な「法の支配」による自由とデモクラシーを成立させ得るのかを考察した。

参加者：48名

(8) 第28回：2015年10月27日(火)

テーマ：日本の未来を拓くよすが(抛)を求めて

－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

世界の中の日本。科学・文化の諸相に彼我の風土の違いを発見した人物

(科学・技術分野)

講演：湯川の希望と苦悩－秀樹の心模様－

講師：佐藤 文隆 京都大学名誉教授

内容：同講師の第25回の講演では、「大戦で国家主義の幻滅を味わった国民の新たな統合のシンボルの一つとして生きることで、湯川秀樹は日本の戦後復興に貢献した。こうした歴史は国民国家での科学者がもちうる稀有な経験であり、それを広く国民が共有する“制度的装置(紙幣肖像、科学単位系など)”にとどめていく工夫が必要である」ことを述べた。

今回は、“制度的装置”の話に加え、「シンボルとして生きる」表の行動の垣間

にみせた湯川のこころ模様に思いを致してみる。「青年湯川」「天才湯川」「戦中戦後」「原子力委員会」「梅園旧居訪問」「渾沌会」「叙勲」などの事例を取り上げて講演者の個人的想像を語が語られた。

参加者：43名

(9) 第29回：2015年11月27日（金）

テーマ：日本の未来を拓くよすが（抛）を求めて

－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

「西の文化」の彼方に「東の文化」を構想した人物

（Part I 思想・文学分野）

講演：森鷗外と日本の個人主義

講師：高橋 義人 京都大学名誉教授・平安女学院大学教授

内容：森鷗外は生前から「日本のゲーテ」と呼ばれてきた。たしかに「全人」的活動をした点で、鷗外はゲーテにもファウストにも似ている。しかし鷗外はファウスト的な「自己形成」を手放して賞賛することは出来なかった。

ドイツに留学した鷗外は、西欧風の個人主義に辟易した。かといって藩医の出身だった鷗外は、武士のなかにも一種の個人主義があると考えざるを得なかった。そこで彼は「個人主義と万有主義」「世間的自己と出世間的自己」「利己的個人主義と利他的個人主義」等々の言い方で、真のあるいは日本的な個人主義を模索し続けた。そのように模索していた時、友人だった乃木大将の殉死事件が起きた。殉死は西欧的な見方からすれば「非個人主義的」である。しかし殉死は日本的な個人主義ではないかと考えた鷗外は、『興津弥五右衛門の遺書』や『阿部一族』を書き、前者では殉死を肯定し、後者ではそれを否定した。こうした模索の最後に鷗外が辿りついたのが、最晩年の史伝三部作『澁江抽斎』『伊澤蘭軒』『北条霞亭』だった。ここには「無私の個人主義」とでもいうべき境地が切り開かれていたということが語られた。

参加者：28名

(10) 第30回：2015年12月24日（木）開催予定

テーマ：日本の未来を拓くよすが（抛）を求めて

－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

「西の文化」の彼方に「東の文化」を構想した人物

（Part I 政治・経済分野）

講演：原敬の理想

講師：伊藤 之雄 京都大学教授

内容：原敬は、1918年に初めて本格的な政党内閣を創り、次第に軍や宮中までも内閣の下で統制し、第一次大戦後の状況に適応し国際協調外交路線をしいた人物である。1856年に南部藩（現・岩手県）の上級武士の家に生まれるが、維新で没落。苦学をして、新聞記者・外交官から政党政治家となった。青年期に中江兆民の私塾でフランスの啓蒙思想、中でも「公利」という概念を身につけ、生涯「公利」を求めた。その実現の具体的手段として、輿論にもとづくイギリス風の政党政治と、東アジアや世界の安定した国際平和秩序の形成を理想とし、それを実現可能な手段で追求した。原は、人間を身分・男女、人種など生まれながらに変えられないもので評価しがちな当時の状況にとらわれず、努力し自立した理性的人間に価値を置いた。政治や外交や、政治家のあるべき姿が見えにくい現代、原敬から学ぶものを考える機会が提供された。

参加者：36名

(11) 第 31 回：2016 年 1 月 25 日（月）

テーマ：日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて
－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－
日本社会の古層から日本的なるものを発掘した人物

（Part I 政治・経済分野）

講 演：北一輝と昭和超国家主義

講 師：筒井 清忠 帝京大学文学部教授・文学部長

内 容：北一輝は、明治末期に幸徳秋水周辺の社会主義者として出発し、宮崎滔天らとともに孫文らの中国革命運動に奔走し、大正後期からは青年将校の国家革新運動の思想的リーダーとなり、2・26 事件に連座して処刑された。その『日本改造法案大綱』は、天皇をいただいた日本の平等化とアジアの植民地からの解放を主張している。それは社会主義と国家主義・アジア主義の複合物と言えるが、この複雑な思想家の軌跡を辿り、大正・昭和日本の運命を考察した。

参加者：44 名

(12) 第 32 回：2016 年 2 月 23 日（火）

テーマ：日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて
－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－
日本社会の古層から日本的なるものを発掘した人物

（Part II 思想・文化分野）

講 演：宮沢賢治における《鉄道》

講 師：田島 正樹 千葉大学文学部元教授

内 容：宮沢賢治は、明治 29 年（1896 年）岩手県花巻に生まれた詩人・童話作家である。若干 37 歳で亡くなるまで、文学のみならず農村の指導や青少年の教育など多彩な活躍をしているが、その作品が有名になるのは死後の事であった。文明開化から取り残された東北の地に生まれながら、彼の作品には、化学や地質学や進化論など当時の先進科学やヨーロッパの精神に対する深い理解が見られる一方、賢治自身の日蓮宗への篤い帰依をも示している。このように、東西の文化、科学と宗教を自在に横断する賢治の精神世界がいかんして成立したのか、当時近代化の象徴と見なされていた鉄道との関連を通して考察した。

参加者：38 名

(13) 第 33 回：2016 年 3 月 23 日（水）

テーマ：日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて
－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－
日本社会の古層から日本的なるものを発掘した人物

（Part III 思想・文化分野）

講 演：松平定信と和歌の思想

講 師：錦 仁 新潟大学名誉教授

内 容：奈良時代から今日へ途絶えることなく続いてきた和歌。明治以降は短歌という呼称が一般的だが、日本人は今も三十一文字の表現を止めようとしない。日本人の心の表現として、永遠に続いていくだろうと思われるが、なぜ日本人は和歌を棄てなかったのか。

日本最初の歌論は『古今和歌集』の序文。和文で書かれた仮名序と漢文で書か

れた真名序が残る。研究史によれば、どちらも中国の文学理論を忠実に模倣したものだという。ならば、和歌の独自性はどこにあるのか。こういう観点が従来の研究史には欠けていたと考える。

今回は仮名序をとりあげ、そこに説かれた和歌の思想が、平安後期の源俊賴や藤原俊成を経て江戸時代の僧契沖たちに引き継がれ、和歌の実作に反映されたことを明らかにする。さらに松平定信は、かれらの和歌の思想をふまえ、和歌と漢詩の詠める歌枕・名所を数多く有する国づくりに邁進し、その気運が全国の藩主たちの間に広まり、和歌に包まれた美しい国、これが松平定信のめざしたことであった。

日本の文化にとって和歌はいかなる役割を果たしたのか。これまでの常識を打ち破って新しい学説を提案した。

参加者：27名